



「南部蝉しぐれ」は、雫石出身者への応援歌

♪南部 盛岡 雫石

思えば遠い ふるさとよ～

この歌は、歌謡界に彗星のようにデビューした雫石町出身の福田こうへいさんが歌う“南部蝉しぐれ”の一節です。雫石を舞台とし作られた詩に、雫石出身の若者が歌うとなれば、心が躍り一層身に沁むものがあります。昨年6月22日恒例の第35回在京雫石町友会が、ふるさととの交流、会員相互の親睦を目的として開催されました。ふるさと雫石からは、深谷町長を始め多くの町の人々、そして数々のおみやげ、宴を盛り上げようと、諸芸余興まで帯同してのご参加でした。宴も酩酊のとき、突然福田こうへいさんがサプライズで駆けつけて下さいました。会場は歓喜の坩堝です。サインをもらう人、写真を撮る人撮られる人、そして握手した手を洗わないという人。福田こうへいさんは「南部蝉しぐれ」と「南部牛追い歌」などを披露して下さいました。

そんな会場の喧噪から一步退って眺め、楽しんでる老夫妻がおられました。この老夫婦の『眩き』と『ふるさとへの想い』を紹介させていただきます。これはふるさと雫石を離れた多くの人々の心の代弁とも言えます。

♪なんぶ もりおか しずくいし

おもえばとおい ふるさとよ～

そんだな、ほんとに遠くまで来たもんだこっちさ（東京）来てがら60年にもなる。あの頃の俺の生まれ在所は、とてもとても良

い所だった。朝な夕なおやま（岩手山）を仰ぎ、滴石たんたんは人の世の生き方の真実を教えてくれた。「親父、母ちゃん！俺東京さ行く、そして東京で一旗揚げる！」分かっているのさそれぐらい。家督を継ぐ者以外、おんずたち（次男三男）は、余りものなのさ。言われねえうちに、仕向けられる前に、作り笑顔で飛び出したのさ。誰にも見られないように、朝早く小岩井の停車場を目指した。「ムセイ（無慈悲）な親だと恨んでおくれ」親父は空を仰ぎ、母は涙を拭った。恨んで背中を向けたこともある。この町友会の集まりに出てみて、初めて雫石さ帰ってみる気になりました。ふるさとはお前達を忘れてはいないとおやま（岩手山）が言う。俺も83歳になりました。「南部蝉しぐれ」の歌詞が身に沁みます。

♪あれをごらんよ 真っ赤な夕日

落ちてゆくのに まだ燃えている～

そうだ！この意気でゆこう。「南部蝉しぐれ」は、雫石出身者への応援歌です。

私は現在、妻ノリ（長山七区出身）と息子家族と同居し、趣味を楽しみながら気ままな隠居生活を楽しんでおります。最近の出来事として、手作り和太鼓を息子と共同製作し、ご縁があつて四国の真言宗大本山に奉納しました。（和太鼓名称「武州高麗郷産やまぶき丸」、鼓面180cm、胴長250cm、重さ130kg、製作期間8カ月。）



和太鼓「武州高麗郷産やまぶき丸」



第35回在京雫石町友会（後列左から5人目が筆者）

浦上公雄さんプロフィール

昭和6年京都市生まれ83才。昭和20年雫石駅前に移住。雫石役場奉職（大火対策本部・固定資産再評価員）→株木建設（葛根田発電所）→岩手県職業訓練課（協会）→昭和36年上京・広告代理業創業→流通業ジャスコ（現イオングループ）入社。東京本社法務部勤務。平成6年定年退職。在京雫石町友会事務局長歴任。